

報告①

ジャン＝バティスト・セーの蔵書への注記  
「山口文庫」セー旧蔵書の書き込み

ジャン＝ピエール・ポティエ\*  
竹永 進 訳、出雲雅志 訳注・補訳

目 次

はじめに

1. ジャン＝バティスト・セーの生涯と著作の概要
2. ジャン＝バティスト・セー没後の蔵書
3. イポリット・コントの蔵書から山口茂教授の個人文庫へ
4. ジャン＝バティスト・セーの自筆書き込み

おわりに

はじめに

『ジャン＝バティスト・セー全集』の第7巻『評注と雑録』(*Notes et pièces diverses*)が2018年1月にフランスで刊行される<sup>[1]</sup>。セーの経済学草稿とその旧蔵書17冊への自筆の書き込みのいずれもが、この第7巻で初めて公表される。自筆の書き込みを収録したセーの旧蔵書17冊のうち5冊は神奈川大学図書館が所蔵する山口文庫の一部である。

セーの蔵書はいったいどのようにして神奈川大学図書館に所蔵されることになったのか。また『経済学概論』(*Traité d'économie politique*)の著者セーはその蔵書にどのような書き込みを残したのか。本稿はこれらの問いにこたえようとするものである。

---

\* Jean-Pierre Potier (Triangle-Université Lumière-Lyon 2)。原題は À propos des annotations de Jean-Baptiste Say sur les livres de sa bibliothèque: Les notes portées sur quelques livres de la collection Yamaguchi。

<sup>[1]</sup> J.B.-Say, *Notes et pièces diverses*, édité par Emmanuel Blanc, Gilles Jacoud et Jean-Pierre Potier, Paris: Economica, 2018, 2 tomes.

## 1. ジャン＝バティスト・セーの生涯と著作の概要

ジャン＝バティスト・セー (Jean-Baptiste Say, 1767–1832) は1767年1月5日にリヨンで生まれた。父は絹織物商と銀行業に携わっていたが、1780年、一家はパリに転居する。セーはいくつかの銀行に勤めた後、イギリスへ渡り1785年から1787年にかけて商社で研鑽をつむ。帰国後、エティエンヌ・クラヴィエール (Étienne Clavière, 1735–1793) が創立した生命保険会社で働いた。

1794年4月、セーはイデオログたちの思想をひろめる媒体のひとつ『哲学・文学・政治旬報』 (*La Décade philosophique, littéraire et politique, par une société de républicains*, Paris, 1794–1804 [1807]) の創刊者のひとりとなり、総裁政府 (1795–1799年) のもとで編集者を務めた<sup>①</sup>。『哲学・文学・政治旬報』の知識人グループは1799年のナポレオン・ボナパルト (Napoléon Bonaparte, 1769–1821) によるブリュメール18日のクーデタに好意的であった。

1799年12月、セーは法案の審査機関である法制審議院の要職に任命され財政部に配属された<sup>②</sup>。同じころフランス学士院の懸賞論文に応募するため「オルビー、すなわち一国の習俗を改良する手段についての試論」 (*Olbie, ou Essai sur les moyens de réformer les mœurs d'une nation*, 1800) を執筆する。

『経済学概論』 (*Traité d'économie politique*) は1803年に出版された。1803年9月、第一統領のナポレオンはこの『経済学概論』に手を加えて自らの介入主義的な経済政策を正当化しようセーに要請するが、セーはこれを拒否した<sup>③</sup>。

1804年1月、セーは法制審議院においてナポレオンの財政政策に反対する意見を表明し、3月にここを追放されたばかりか、間接税務局長のポスト

---

<sup>②</sup> セーは法制審議院に3次にわたって報告書を提出した。そのうちのひとつは、ジェルミナル・フラン (Franc germinal, 革命暦11年ジェルミナル7日は1803年3月27日) と呼ばれた貨幣の改鑄にかんするものであった。これらの報告書は『セー全集』第5巻『社会・政治著作集』 (*Oeuvres morales et politiques*, Paris: Economica, 2003, pp.237–265) に収録されている。

<sup>③</sup> E. Daire, *Notices sur la vie et les ouvrages de Jean-Baptiste Say* (「ジャン＝バティスト・セーの生涯と著作についての概要」), in C. Comte, E. Daire and H. Say (eds.), *Oeuvres diverses*, Paris: Guillaumin, 1848, pp.VIII–IX.

トをも拒絶した<sup>[4]</sup>。そのため1805年にセーは、イサック＝ルイ・グリヴェル (Isaac-Louis Grivel, 1753-1820) と共同で、ドーヴァー海峡に近いパ＝ド＝カレ県オシー＝レ＝エスダンに綿織物工場を設立する。1811年には450人もの労働者を雇用するまでになるが、ナポレオン・ボナパルトが発令した大陸封鎖令によって原綿の入荷が滞り、しだいに工場の経営に支障がでるようになった。グリヴェルの反対にもかかわらず、セーは自らの株式を譲渡し、『経済学概論』の全面的な改訂をめざして第2版の準備に全力でとりくんだ。

ナポレオン戦争での連合国側の勝利と1814年6月にナポレオン1世が退位したことにともない、ようやくセーは『概論』第2版の出版にこぎつけた。評判になった『概論』は次々と版を重ね、そのたびに改訂された(第3版は1817年、第4版は1819年、第5版は1826年)。さらに1814年9月から12月にかけてイギリスの通商と産業の現況を調査するよう暫定政府から派遣命令を受け、帰国後の1815年に『イギリスとイギリス人について』(*De l'Angleterre et des Anglais*) と題する小冊子を公刊した。同じ1815年には『経済学問答』(*Catéchisme d'économie politique*) も刊行している(第2版は1821年、第3版は1826年)。

王政復古期の1816年から1819年のあいだ、セーはパリのアテネ・ロワイヤルで経済学を講義した。1819年12月にはフランス国立工芸院の「産業経済学」の教授に任命され、生涯にわたってじつに多様な聴講者を相手に講義をつづけた。

1820年、セーは経済学の諸問題とくに商業の全般的停滞の原因に関する『マルサス氏宛の書簡』(*Lettres à M. Malthus sur différents sujets d'économie politique; notamment sur les causes de la stagnation générale du commerce*) を出版し、また、フランス国立工芸院での講義をもとにした『実践経済学全講義』(*Cours complet d'économie politique*) 全6巻を1828年から1829年にかけて刊行した<sup>[5]</sup>。1831年3月にはセーのために経済学の講座がコレージュ・ド・フランスに創設される。J.-B. セーは1832年11月15日にパリで没した。

[4] 間接税務局は飲料にたいする税を徴収するため1804年に設立された。

[5] セーはまた *Revue encyclopédique* にも定期的に寄稿している。

## 2. ジャン＝バティスト・セー没後の蔵書

J.-B. セーは充実した自らの蔵書のいくつかによく注釈を書き込んでいた。そのなかに後で抹消された次のような一文がある。「1809年5月10日、蔵書を数えてみた。小冊子も1冊に数えると1,452冊ある。さらに *Courrier de Provence* と *Bulletin des lois* のコレクションがこれに加わる」<sup>[6]</sup>。しかし残念ながらセーの草稿類のなかに蔵書リストはひとつも見あたらない。セーが亡くなったときには蔵書数はこれよりはるかに多かったと想像される。今日、その蔵書がどれほど充実したものだったのか、とくに経済学関連のものについては、はっきりしたことはわからない。

不動産も遺言もなかったため、J.-B. セーの遺産相続は、交渉人を介在させることなくセーの子どもたち全員の合意により私署証書をもって実施された。1832年12月14日の日付の証印が押された文書に記されている協約にもとづき、セーの4人の子どもたち、オラス・エミール (Horace Émile Say, 1794-1860)、アドリエヌ (Adrienne Say, 1796-1857, シャルル・コント (Charles Comte, 1782-1837) と結婚)、オクタヴィー、通称ファニー (Octavie Say, dite Fanny, 1804-1865, シャルル＝ラウル・ドゥヴァル (Charles-Edmond-Raoul Duval, 1807-1893) と結婚)、そしてアルフレード (Alfred Say, 1807-1864) が「示談による目録」を作成し、金融資産および動産を4等分した<sup>[7]</sup>。故人の表明した希望にそってシャルル・コントが既刊の諸著作の再刊<sup>[8]</sup>と未刊の諸著作の刊行<sup>[9]</sup>を担当した。しかし残念ながら、これらの著作中にJ.-B. セーの蔵書がその後どうなったかを示す記述はない<sup>[10]</sup>。蔵書は4つに分割されたと思われるが、19世紀には

<sup>[6]</sup> *Economie politique-I*, f. 83, in: *Notes et pièces diverses*, vol. VII des *Œuvres complètes*, Paris: Economica, 2018, tome 1, note 108, p.688. を参照。

<sup>[7]</sup> フランス国立図書館が所蔵するセー・アーカイブ Documents divers : associations et papiers de familles, NAF 26251, folios 270-271. による。

<sup>[8]</sup> C. コントは注釈と序文を付した増補改訂版の『経済学問答』第4版 (Paris: Aimé-André, 1834) を出版した。

<sup>[9]</sup> C. コントは *Mélanges et correspondance d'économie politique* (Paris: Chamerot, 1833) を Notice théorique sur la vie et les ouvrages de Jean-Baptiste Say とともに刊行した。

<sup>[10]</sup> 1833年5月10日付けのJ.-B. セーの相続申告証書 (1424 F., 40) には動産の価額が記載されている。添付の動産一覧は現存しないが、蔵書が税務当局に申告されなかったことは明らかである (パリ文書館所蔵の相続申告書 DQ7 3439)。

いるとセーの相続人とその子孫たちによってそれらの多くが散逸した<sup>[11]</sup>。この散逸過程をたどり直すことはきわめて難しい。いくつかの書籍はシャルル＝ラウル・デュヴァルに引き継がれたことが知られている。経済学関連の書籍は大半がオラス・セーとシャルル・コントのあいだで分割されたらしい。

しかしオラス・セーが取りもどしたいくつかの書籍を特定することは可能である。たとえば、多くの書き込みのあるアダム・スミス (Adam Smith, 1723-1790) の『国富論』 (*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1st ed., 1776) 第5版 (1789年) の場合がそうである。Guillaumin 社から経済学選集の第5巻・第6巻として1843年に出版される予定で準備されていた『国富論』の新しいフランス語版のために、オラスは父が持っていた『国富論』に書き込まれた9つの批判的評注を提供している。オラスの死後、『国富論』はその息子レオン・セー (Jean-Baptiste Léon Say, 1826-1896) が引き継ぎ、レオンは1888年にこれをパリのフランス学士院図書館へ寄贈した<sup>[12]</sup>。京都産業大学の橋本比登志名誉教授は、*Economic and Business Review* (Kyoto Sangyo University) に、1980年にセーが『国富論』に書き込んだ批判的評注を<sup>[13]</sup>、また1982年には『国富論』の内容を要約した評注をそれぞれ発表した<sup>[14]</sup>。

オラス・セーは父が著者マルサス (Thomas Robert Malthus, 1766-1834) から譲り受けた著作も相続している。そのうちもっとも重要なのは『経済学原理』初版 (*Principles of Political Economy Considered with a View to their Practical Application*, London: John Murray, April 1820) である。オラス・セーのおかげで、Guillaumin 社から経済学選集の第8巻

---

<sup>[11]</sup> ただし、いくつかの書籍はセーの子孫がいまなお保有している。

<sup>[12]</sup> これはフランス学士院図書館に整理番号 Ms 3463-3465のもとに所蔵されている。

<sup>[13]</sup> Hashimoto, Notes inédites de J.-B. Say qui couvrent les marges de la Richesse des nations et qui la critiquent: rédigées avec une introduction, *Economic and Business Review* (Kyoto Sangyo University), vol.7, 1980, pp.53-81, rééd. in: *On the Wealth of Nations. Contemporary Responses to Adam Smith*, edited by Ian S. Ross, Bristol: Thoemmes, 1998, pp.188-203.

<sup>[14]</sup> Hashimoto, Notes inédites de J.-B. Say qui couvrent les marges de la Richesse des nations et qui la résumant: rédigées avec une introduction, *Economic and Business Review* (Kyoto Sangyo University), vol.9, 1982, pp.31-133.

として出版されたマルサスの著作のフランス語訳に、序論に関連する2つの未公刊評注《notes inédites》が1846年に組み入れられた。同じようにオラス・セーのおかげで、マルサスの『経済学における諸定義』(*Definitions in Political Economy*, 1827)に書き込まれた5つの評注も、同じ経済学選集のフランス語訳に組み入れられることになった。

J.-B. セーが評注を書き入れた最後期の書物のひとつであるオーギュスト・ワルラス (Auguste Walras, 1801-1866) 『富の性質と価値の起源について』(*De la Nature de la richesse et de l'origine de la valeur*, Paris: A. Johanneau, 1831) は、おそらくオラス・セーからオーギュスト・ワルラスに譲渡されたのであろう<sup>[15]</sup>。

父オラスの死後、レオン・セーが J.-B. セーの蔵書のうちからいくつかの書物を引き継いだ。このなかには『国富論』のほかにもシモン・ド・シモンディ (Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi, 1773-1842) の『経済学新原理』初版 (*Nouveaux principes d'économie politique*, Paris: Delaunay, 1819) が含まれている。これは、現在、アメリカ合衆国のテキサス大学ハリー・ランソム・センターに所蔵されている<sup>[16]</sup>。

シャルル・コントの蔵書に入り込んだ可能性のある J.-B. セーの旧蔵書を特定することは、いっそう困難である。これらのなかには哲学関係の書籍もあるが、それだけではない。次男のイポリット・コント (Hyppolite Comte, 1821-1880) が父シャルルの蔵書の主たる相続人であったらしい。その経済学関係の蔵書のなかには、オラス・セーが所蔵していたものばかりでなく、シャルル＝ラウル・デュヴァルが保有していたものまでが混

---

[15] オーギュスト・ワルラスの、ついでレオン・ワルラス (Marie Esprit Léon Walras, 1834-1910) の蔵書にあった書籍は、現在、モンペリエのアントネリ基金に整理番号 ANT2653のもとに所蔵されている。オーギュスト・ワルラスは、自分の息子レオン・ワルラスを補償受取人とする1862年3月31日付のレオン・セー宛て書留書簡で、次のように述べている。「私は、高名な貴殿の御祖父 J.-B. セー氏ならびに御尊父のオラス・セー氏と光栄このうえない交誼を結ぶという名誉と幸運に浴しました。ご両人がかわることなく私に示された厚情は私にとってよい思い出です」(A. Walras, *Correspondance*, vol. IV des *Oeuvres économiques complètes*, Paris: Economica, 2005, p.537)。

[16] 整理番号 HB 163 S6。これら2つの書籍には表紙の裏側に《Bibliothèque de Mr Léon Say》というスタンプが押されている。

在している<sup>[17]</sup>。1841年に法律で学位を取得したイポリット・コントは弁護士になり1849年までパリの控訴院に所属した。その後マルセイユの民事裁判所の検事補に任命され、さらに北部鉄道会社の幹部職員になった<sup>[18]</sup>。イポリットが亡くなったとき遺産相続人がいなかったため、そのすべての書籍に《BIBLIOTHEQUE HIP. COMTE》のスタンプが押された蔵書はいつのまにか散逸してしまった。それはおそらく19世紀末以降のことであつたと考えられる。

### 3. イポリット・コントの蔵書から山口茂教授の個人文庫へ

山口茂（1893-1974）は、1925年から1927年にかけて日本政府によって派遣され、経済学の研究のためドイツ、フランス、イギリスおよびアメリカ合衆国に留学した<sup>[19]</sup>。しかし、山口が主として滞在したのはフランスであつたらしい。そのことは、たとえば、ソルボンヌから配布された『パリ大学学生手帳』（*Livret de l'étudiant de l'Université de Paris*）の1925-26年版と1926-27年版、また1927年2月15日付けの『パリ評論』（*Revue de Paris*）がその蔵書中にみられることから裏付けられる。おそらくパリ滞在中に山口が買入れた多くの書籍のなかに、イポリット・コントの蔵書があつたのであろう<sup>②</sup>。帰国後、東京商科大学（後の一橋大学）教授となつた山口は、1943年9月16日、J.-B. セーが評注を書き込んだリカードウ（David Ricardo, 1772-1823）『経済学および課税の原理』第3版（*On the Principles of Political Economy and Taxation*, 3rd ed., 1821）<sup>[20]</sup>とマルサス『経済学における諸定義』（*Definitions in Political Economy*, 1827）<sup>[21]</sup>

---

<sup>[17]</sup> これは次の書物である。J.-B. Say, *A Treatise on Political Economy; or The Production, Distribution, and Consumption of Wealth. Translated from the fourth edition of the French by C. R. Prinsep, M. A. with notes by the translator*, London: Longman, Hurst, Rees, Orme & Brown, 1821. 『経済学概論』第4版の英語訳のタイトルページの裏側には「ラウル・デュヴァルへ。J.B. セーの蔵書、自筆の評注入り」という書き込みがある。しかしこの書き込みが誰の手によるものかは不明（オランダのArnold Heertje 教授のコレクションより）。

<sup>[18]</sup> J. Valynseele, *Les Says et leurs alliances*, Paris: Chez l'auteur, 1971, pp.69, 75.

<sup>[19]</sup> 出雲雅志教授から伝えられた情報による。

<sup>[20]</sup> 前扉ページに《BIBLIOTHEQUE HIP. COMTE》という蔵書印が押されている。寄贈の日付はタイトルページの左下に漢字で記入されている。

の2冊を大学図書館へ寄贈した。この2冊は現在、一橋大学社会科学古典資料センターに所蔵されている<sup>[22]</sup>。マルサスの『経済学における諸定義』への書き込みの全容ならびに欄外記号は、2002年に初めて、大阪産業大学の喜多見洋教授と東日本国際大学の水田健教授によって『一橋大学社会科学古典資料センター年報』に公表された<sup>[23]</sup>。

1954年、山口茂教授は神奈川大学へ移り、経済学部長となった。1966年に退職し、神奈川大学図書館におよそ2,400冊におよぶ貴重な本を寄贈した<sup>[24]</sup>。

私たちが山口の蔵書について知ったのは、すでにセーの『評注』の編集がかなり進んでいた2015年になってからのことである。インターネット上で私たちが見つけたこの蔵書中の文献は、Francis Place, *Illustrations and Proof [...]*とJeremy Bentham (ed.), *Papers Relative to Codification and Public Instruction [...]*の2冊だけであった。そこで、私たちは出雲雅志教授に連絡をとり、イポリット・コントの蔵書印のある書籍に書き込みがないか神奈川大学図書館で確認するよう依頼した。2015年12月15日以降、出雲教授はゼミの学生および図書館職員の荻原直子さんとともに山口文庫の書籍を調査し、その結果、イポリット・コントの蔵書印が押された書籍20タイトル36冊を発見した。なかにはセーによる書き込みのないものもいくつかあったが、たとえば次のような書籍はセー旧蔵書の一部であったと考えられる<sup>[25]</sup>。

---

<sup>[21]</sup> タイトルページと前扉ページ、77ページそして261ページの裏面に《BIBLIOTHEQUE HIP. COMTE》という蔵書印が押されている。寄贈の日付はタイトルページの左下に漢字で次のように印刷されている。《昭和18年9月16日》。

<sup>[22]</sup> それぞれの整理番号は TUCR358と TUCM229D である。

<sup>[23]</sup> Hiroshi Kitami and Ken Mizuta (2002), Les notes de J.-B. Say sur l'édition originale de 'Definitions in Political Economy' de T. R. Malthus, *Bulletin of the Center for Historical Social Science Literature* (Hitotsubashi University), vol.22, mars 2002, pp.2-7.

<sup>[24]</sup> 63ページからなる山口文庫のカタログを参照。

<sup>[25]</sup> イポリット・コントの蔵書印が押されたシスモンディの『経済学新原理』第2版(1827年)も含まれているが、これはJ.-B.セーの蔵書にあったものではないらしい。オランダのArnold Heertje教授の蔵書となっている同書の別の1冊にセーの自筆の書き込みがみられるからである。

- ・ John Maitland [Comte de Lauderdale], *Recherche sur la nature et l'origine de la richesse publique*, Paris: Dentu, 1808.
- ・ Jeremy Bentham (ed.), *Papers Relative to Codification and Public Instruction, including Correspondence with the Russian Emperor, and Divers Constituted Authorities, in the American United States, published by Jeremy Bentham*, London: J. McCreery, 1817. 前扉のページに《著者より》と書かれている。
- ・ Robert Hamilton, *An Inquiry Concerning the Rise and Progress, the Redemption and Present State, and the Management, of the National Debt of Great Britain and Ireland*, 3rd ed., Edinburgh: Oliphant, 1818. J.-B. セーが賞賛をこめてしばしば引用した著作である<sup>[26]</sup>。
- ・ Francis Place, *Illustrations and Proofs of the Principle of Population, including An Examination of the Proposed Remedies of Mr Malthus and A Reply to the Objections of Mr Godwin and Others*, London: Longman, Hurst, Rees, Orme, and Brown, 1822.<sup>[27]</sup>
- ・ Vital Roux, *Analyse historique de l'établissement du crédit public en France* (Paris: Galerie de Bossange père, 1824.<sup>[28]</sup>
- ・ Charles Ganilh, *De la science des finances, et du ministère de M. le Comte de Villèle* (Paris: C. J. Trouvé, 1825)<sup>[29]</sup>

---

<sup>[26]</sup> 1820年1月15日にハミルトン (Robert Hamilton, 1743-1829) はJ.-B. セーに彼の著作の「最後の版」を贈っている (Archive Say, Bibliothèque Nationale de France, NAF 26252)。これは1818年の第3版にまちがいない (初版は1813年、第2版は1814年)。

<sup>[27]</sup> この著作については次を参照。J.-B. Say, *Illustrations and proofs, etc. -Eclaircissements et preuves du principe de population, contenant un examen des remèdes proposés par M. Malthus, et une réplique aux objections de M. Godwin; par Francis Place, Revue encyclopédique, tome 14, 1822, pp.521-526. Encyclopédie progressive* に掲載された論文 *Economie politique* に付された *Bibliographie de l'économie politique* のなかでセーは次のように言っている。「本書はすべての経済学者が人口について受け入れている諸原理を確認している。著者はイギリスでもっとも正しい判断ができる人物のひとりである」(1826年、p.303)。

<sup>[28]</sup> この著作については次を参照。J.-B. Say, *Analyse historique de l'établissement du crédit public en France; par Vital Roux, régent de la banque [...], Revue encyclopédique, tome 22, 1824, pp.421-422.*

- ・ Charles Ganilh, *Dictionnaire analytique d'économie politique*, Paris: Ladvoat, 1826.
- ・ Jeremy Bentham, *Théorie des peines et des récompenses, ouvrage extrait des manuscrits de M. Jérémie Bentham, par Etienne Dumont*, 3<sup>e</sup> édition, Paris: Bossange frères, 1826, tome 2, 429 p. 本書は J.-B. セーに献呈されている<sup>[30]</sup>。
- ・ Frédéric Skarbek, *Théorie des richesses sociales, suivie d'une Bibliographie de l'économie politique*, Paris: A. Sautelet et C<sup>ie</sup>, 1829, 2 tomes.

#### 4. ジャン＝バティスト・セーの自筆書き込み

山口文庫のなかに出雲教授とゼミの学生たちは J.-B. セーの書き込みのある次の5つの書籍計6冊を発見した<sup>③</sup>。

- ・ Gaston de Lévis, *Maximes et réflexions sur différents sujets de morale et de politique*, 1808.
- ・ Charles Ganilh, *Des systèmes d'économie politique*, 1809.
- ・ Charles Ganilh, *La théorie de l'économie politique*, 1815.
- ・ Thomas Robert Malthus, *An Essay on the Principle of Population*, 5th ed., 1817.
- ・ Dubois-Aymé, *Examen de quelques questions d'économie politique, et notamment de l'ouvrage de M. Ferrier intitulé: Du gouvernement considéré dans ses rapports avec le commerce*, 1823.

これらはきわめて重要な発見である。私たちのこれまでの調査では、

---

<sup>[29]</sup> この著作については次を参照。J.-B. Say, De la science des finances, et du ministère de M. le Comte de Villèle; par M. Ganilh, *Revue encyclopédique*, tome 25, 1825, pp.641-648.

<sup>[30]</sup> 表紙の上のほうにおそらくエティエンヌ・デュモン (Pierre Étienne Louis Dumont, 1759-1829) の筆記で《J.-B. Say 様》と書かれている。*Encyclopédie progressive* に掲載された論文 Economie politique に付された Bibliographie de l'économie politique のなかでセーは次のように言っている。「第2 [巻] はほとんどすべての経済学に関する問題を扱っている」(1826, p.302)。

『経済学概論』初版が刊行された1803年から1817年までのあいだに、評注が書き込まれた書籍はみつからなかった。ところが、このあいだに評注が書き込まれた書籍4点が出版されていたのである<sup>④</sup>。

次に興味深い書き込みの例をいくつか示してみよう〔太字はセーによる書き込みを示す〕。

- 1) Gaston de Lévis, *Maximes et réflexions sur différents sujets de morale et de politique, suivies de quelques essais, seconde édition augmentée d'un supplément*, Paris: Xhrouet, 1808.

アリエージュ県出身の貴族であったピエール＝マルク＝ガストン・ド・レヴィ (Pierre-Marc-Gaston de Lévis, 1764-1830) は、国王(後のルイXVIII世)の弟の護衛隊長で、革命まではその側近中の側近であった。1789年に三部会に選出されたレヴィはいくつかの改革に好意的で、ミラボー (Honoré-Gabriel de Riquetti, Comte de Mirabeau, 1749-1791) に近い立場にあり、イギリス流の立憲君主制を理想としていた<sup>[31]</sup>。1792年に国外へ亡命し、ブリュメール18日のクーデタ後にフランスに戻るが、自らの自由主義的信念に忠実であったレヴィは、ナポレオン1世に仕えることを拒んだ。警察から監視されていたレヴィは文学活動に専念する。1814年以後の王制復古期に貴族院に入りそこで財政問題を扱った。1815年9月に皇帝の私的諮問機関の一員となり、その少し後にフランス学士院に会員として迎えられた<sup>[32]</sup>。

『道徳および政治の諸問題についての箴言と考察』(*Maximes, préceptes et réflexions sur différents sujets de morale et de politique*) は、レヴィの存命中に第5版まで刊行され(初版は1807年、増補第2版は1808年、第3版は1810年、第4版は1812年、第5版は1825年)大きな成功をおさめた。

---

<sup>[31]</sup> レヴィは後に『19世紀はじめのイギリス』(*L'Angleterre au commencement du dix-neuvième siècle*, 1814) でイギリスの政治制度について考察している。

<sup>[32]</sup> レヴィのその他の著作として『回想と肖像:1780-1789年』(*Souvenirs et portraits-1780-1789*, 1813, 2e édit., 1815)、『財政についての道徳的考察』(*Considérations morales sur les finances*, 1816)、『フランスの財政状況に関する考察』(*Considérations sur la situation financière de la France*, 1824) をあげておく。レヴィが妻に宛てた書簡が最近発見され『革命書簡:1784-1795年 ポリーヌ宛て書簡』(*Ecrire la Révolution : 1784-1795, Lettres à Pauline*, Cahors: La Louve éditions, 2011) と題して出版された。

この著作は、ラ・ロシュフコー (François VI, Duc de La Rochefoucauld, Prince de Marcillac, 1613-1680) やラ・ブリュイエール (Jean de La Bruyère, 1645-1696)、シャンフォール (Sébastien-Roch Nicolas de Chamfort, 1741-1794) といったフランスの著述家たちが17-18世紀に広く実践した文学ジャンルに属している。しかしこれには、時代の道徳や風俗についての箴言にくわえ、さまざまな統治の形態や軍事技術のほか火器についての格言や考察も含まれている。

J.-B. セーはガストン・ド・レヴィのこの著作の第2版を読み、多くの評注を書き残した。以下はJ.-B. セーが書いた80の評注から選んだいくつかの例である<sup>[33]</sup>。

#### 第1部 道徳の諸問題についての箴言 第1章 箴言と教訓

P.7.

XVII. 人間の精神はその答えからよりもその問いからより容易に判断しうる。

[その下に] それは、問いを立てるためには、どう答えるべきかを見出すよりも多くの思考が必要だからである。

XXVII. 仕事以外のすべてのことにはうんざりする。

[その下に] ああ！ ああ！ ああ！ あなたはそれを気にもかけていないようだ。

P.10.

XXXV. 不可能なのは矛盾をはらむことだけである。

[その下に] それと、自然の法則に反すること。

P.26.

XCXIX. 多くを望めば満足は小さい。

[その下に] 矛盾。私はむしろ、望みが少なればしばしば満足を得られる、のほうをとろう。さまざまな主題についてのとらわれない思考と省察。

P.77.

---

<sup>[33]</sup> 本書は神奈川大学図書館に YA 049-1の整理番号のもとに所蔵されている。前扉ページとタイトルページおよび77ページ、224ページに《BIBLIOTHEQUE HIP. COMTE》という蔵書印（中央にインクで No.929と記されている）が押されている。

36. われわれは過去の時代の人々の無知を揶揄するが、自分自身が将来の世代に笑われそうなことをしたり言ったりしていることには無頓着である。<sup>+</sup>

[ページの下に] +われわれの無知には過去の時代のそのような滑稽さはない。なぜなら、われわれには自分の無知を知るほどの知恵はなく、また、われわれの仕事が将来の発見を準備するからである

[本書の製本業者が切断した本文の続き]<sup>⑤</sup>。

P.85.

59. 真理が絶対的で不変であるのは道徳と精密科学に関連してのみのことである。それ以外においては真理はその時々状況にしたがう。

[右側の欄外に] 真理は常に真であるが、いつも既知であるとは限らない。

## 第2部 政治 第1章 政治の箴言

Pp.119-120.

XI. 君主が偉業を成し遂げようとするなら、まず富裕であることが必要である。それゆえ、貿易差額が自分の治める国にとって有利になるようにしなければならず、そうしてこそ毎年税収を増やしつつ人民を真に安心させることができるのである<sup>[34]</sup>。+

[ページの下に] +また貴殿も、君主に説教をたれる前に経済学を勉強しなさい。そうすれば諸国を富ませ租税を拡大するのが貿易差額ではないことがわかるだろう。

2) Charles Ganilh, *Des systèmes d'économie politique, de leurs inconvénients, de leurs avantages, et de la doctrine la plus favorable aux progrès de la richesse des nations*, Paris: Xhrouet, 1809.

3) Charles Ganilh, *La théorie de l'économie politique, fondée sur les faits résultants des statistiques de la France et de l'Angleterre ; sur l'expérience de tous les peuples célèbres par leurs richesses ; et sur les*

---

<sup>[34]</sup> ガストン・ド・レヴィは『回想と肖像』(*Souvenirs et portraits*, nouvelle édition, Paris: Mercure de France, 2011, pp.238, 282)においても同様のアプローチを擁護している。

*lumières de la raison [...]*, Paris: Déterville, 1815.

シャルル・ガニル (Charles Ganilh, 1758-1836) はパリの高等法院の弁護士だったが、1789年にはパリ市庁の公安委員会の委員となった。国民公会のもとで投獄され、テルミドール9日 (1794年7月27日) に釈放された。J.-B. セーは総裁政府と統領政府の時代にしばしばガニルに会う機会をもった。ガニルはブリュメール18日 (1799年11月9日) のクーデタを支持し革命裁判所のメンバーになったが、第一統領であるナポレオンの政策を批判したため1802年に追放された。ガニルは第一帝政のもとで『人民の公的収入に関する政治論』 (*Essai politique sur le revenu public des peuples [...]*, 1806年) と『経済学体系』 (*Des systèmes d'économie politique*, 1809) の2冊の著作を刊行した。1815年にセーはガニルと再び接触し『経済学問答』の初版ならびに小冊子『イギリスとイギリス人について』を贈呈している<sup>[35]</sup>。ガニルは同年に刊行した『経済学の理論』 (*La théorie de l'économie politique*) をセーに贈った<sup>[36]</sup>。王政復古のもとでガニルは1816年にカンタル県選出の代議士となり1819年に再選されている。議会では自由主義派に属した<sup>[37]</sup>。

---

<sup>[35]</sup> 1815年7月14日付けのJ.-B. セーのガニル宛ての手紙の写しおよび1815年7月18日付けのガニルのJ.-B. セー宛ての手紙。Archives Say, Bibliothèque Nationale de France, NAF 26252と26253。

<sup>[36]</sup> J.A. シュンペーターはガニルについて次のように述べている。「彼の『経済学体系』1809年 (*Systèmes d'économie politique*) は早期の経済思想史である。この書はその出版の日付に鑑み、また当時流行のスミス=セーの自由貿易論の潮流に対して無批判的に迎合するところがなかったのに鑑みると、ここに挙げるに値するものである。彼の『経済学の理論』 (*Théorie de l'économie politique...*, 1815) はその「現実的」ないし「事実調査的」性質によって、まったく無意義なものになるのを救われている」(1954年、pp.498-499, note 18、東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史』(中) 227ページ、岩波書店、2005年)。またマルクスはこの「新重商主義者」の『経済学の理論』を「みじめ」と断じている (大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス=エンゲルス全集』第23巻a (『資本論』) 237ページ注3、大月書店、1965年)。

<sup>[37]</sup> 彼はさらに多数の著作を出版している。たとえば *De la législation, de l'administration et de la comptabilité des finances de la France, depuis la Restauration*, Paris: Deterville, 1817. *De la science des finances, et du ministère de M. le Comte de Villèle*, Paris: C. J. Trouvé, 1825. および *Dictionnaire analytique d'économie politique*, Paris: Ladvocat, 1826.

J.-B. セーは『経済学体系』 (*Des systèmes d'économie politique*) の第2巻に8つの評注を書き込み<sup>[38]</sup>、また『経済学の理論』 (*La théorie de l'économie politique*) には6つの評注を書き込んでいる<sup>[39]</sup>。以下は『経済学の理論』に記された書き込みの一例である。

### 第1巻 序章

P.39. [...] 産業化・文明化されたヨーロッパにおける経済学の経験的理論<sup>[40]</sup>。第2部では、私は、富一般、さまざまな労働部門におけるその使用およびそれぞれの使用による総生産と純生産、これらに関する経済学の思弁的理論を、同じ対象に関するヨーロッパの経験的理論<sup>[41]</sup>と対比するであろう。

[右側の空欄] 互いに排除しあう言葉。

J.-B. セーがその手稿で次の文章を本書の評注にあてていることを指摘しておきたい。

ガニル氏 [...]。

経験的理論は少しもない：経験主義とは理論の欠如とみなされている。

私は、あなたが統計に基礎をおいて、これが経済学の経験的理論だとしていることが理解できない。統計とはある国のある時点における事実である。理論とはこの事実の説明である。どんな理論も事実にもとづいて事実を説明すると主張する [...]。

あなたはフランスに存在していた富を一定の原因に帰するだろうが、他

---

<sup>[38]</sup> この著作は、同じ著者の他の著作と同様、整理番号 YA 331, 4-23のもとに神奈川県図書館に所蔵されている。第1巻の前扉ページとタイトルページ、および第2巻の前扉ページとタイトルページそして408ページに《BIBLIOTHEQUE HIP. COMTE》という蔵書印が押されている。

<sup>[39]</sup> ふたつの巻の前扉ページとタイトルページに《BIBLIOTHEQUE HIP. COMTE》という蔵書印が押されている。第2巻の前扉ページの上部には《セー氏へ、著者より》と記されている。

<sup>[40]</sup> イタリックの強調はJ.-B. セーによる。

<sup>[41]</sup> イタリックの強調はJ.-B. セーによる。

の著作家はそれを他の諸原因に帰すであろう。どちらが正しいのか。それはより優れた統計を示したほうではなく、物事の本質をよりの確に知り諸事実の連鎖についてより正しく推論したほうである。したがって誰も理論と科学の哲学なしですますことはできず、統計表は証拠とはならないのである<sup>[42]</sup>。

- 4) Thomas Robert Malthus, *An Essay on the Principle of Population or, A View of its Past and Present Effects on Human Happiness [...]*, *The fifth edition with important additions*, 3 vols., London: John Murray, 1817.

J.-B. セーがその蔵書中にマルサスの『人口論』第2版を所蔵していたことはわかっている<sup>[43]</sup>。だがこれは今日まで発見されていない。セーは1817年に出版された『人口論』の第5版も同様に受け取っている<sup>[44]</sup>。この第5版の3巻のうち書き込みがあるのは第2巻のみである。しかもそれは、第2巻の第VII章と第IX章が1809年に出版されたピエール・プレヴォ (Pierre Prévost, 1751-1839) のフランス語訳<sup>[45]</sup>にはみられない、と

---

<sup>[42]</sup> Finances II, f. 111, in : *Notes et pièces diverses*, vol. VII des *Oeuvres complètes*, Paris: Economica, 2018, tome 1, p.496.

<sup>[43]</sup> 次の文献を参照。J.-B. Fréry, Jean-Baptiste Say et la question de la population, *Cahiers d'économie politique*, n° 66, 2014, pp.70-71 et note 4.

<sup>[44]</sup> この著作は、整理番号 YA 331, 4-31のもとに神奈川大学図書館に所蔵されている。全3巻のタイトルページおよび第1巻の496ページと第3巻の500ページに《BIBLIOTHEQUE HIP. COMTE》という蔵書印が押されている。

<sup>[45]</sup> ピエール・プレヴォによるマルサス『人口論』フランス語訳は、1807年の第4版にもとづき *Essai sur le principe de population, ou Exposé des effets passés et présents de l'action de cette cause sur le bonheur du genre humain [...]*, Paris: J.-J. Paschoud, 3 tomes, 1809. という表題で出版された。第2巻には原書と同じく第VII章 (*Des obstacles à la population en Angleterre*) と第IX章 (*De la fécondité des mariages*) も含まれている。1817年の *Essai* 第5版はかなりの増補を含む。その第2巻は、第VII章 *Of the Checks to Population in France (continued)* と第IX章 *Of the Checks to Population in England (continued)* が新たに加わったことによって章の番号が変更されている。1823年、ピエール・プレヴォと息子のギョーム (Guillaume Prevost, 1799-1883) はこの第5版をもとにした翻訳を同じタイトルを付して出版した (Paris: J.-J. Paschoud, 4 vols.)。この新訳には上記の2つの新しい章も含まれている。

いうことを記しているだけである<sup>⑥</sup>。

- 5) Dubois-Aymé, *Examen de quelques questions d'économie politique, et notamment de l'ouvrage de M. Ferrier intitulé: Du gouvernement considéré dans ses rapports avec le commerce*, Paris: Pelicier, 1823.

エコール・ポリテクニーク出身（1796年入学）のジャン＝マリー＝ジョゼフ・エメ・デュボワ（Jean-Marie-Joseph Aimé Dubois, dit Dubois-Aymé, 1779-1846）は、ナポレオン・ボナパルトのエジプト出征に従軍し、そのあいだに多数の歴史・地理情報を収集した。1801年に帰国後、税関行政職に就く。1812年にイタリアの都市リヴォルノの税関局長に任命され、その後1814年に帰国してから、ロリアン、ナント、マルセイユ、パリで同じ地位を歴任した。1831年、野党陣営の一員としてイル・エ・ヴィレヌヌ県選出の代議士となる。1823年に『経済学のいくつかの問題とくに『商業とかかわって考察された統治について』と題されたフェリエ氏の著作に関する検討』（*Examen de quelques questions d'économie politique, et notamment de l'ouvrage de M. Ferrier [...]*）を刊行した。J.-B. セーは本書に一箇所しか書き込んでいない。それは糊で貼り付けられた紙片に書かれている<sup>[46]</sup>。

Pp.109-110. フェリエ氏に立ちもどろう [...]。消費可能な物が豊富に存在することが人民の富をなすということである [...]。その後、労働が土地の生産物を変形させそれに新しい価値を与える。これらの生産物はその新価値を人間の手に全面的におっている。 [...]

[貼り付けられた紙片に]

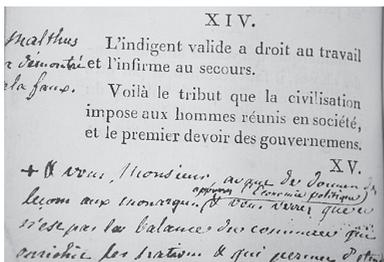
フェリエ氏は、富は消費可能な物が豊富に存在することにあるのであって、それらの価値にあるのではない、という。そしてそのすぐ後に、労働が生産的であるのはそれが土地の生産物に価値を付け加えるからである、とする。もし価値の増大が富の増大であるとすれば、フェリエ氏自身の理解する価値とは富のことである。所有の対象となっている

<sup>[46]</sup> この著作は、整理番号 YA 331, 4-16のもとに神奈川大学図書館に所蔵されている。前扉ページと248ページに《BIBLIOTHEQUE HIP. COMTE》という蔵書印が押されている。

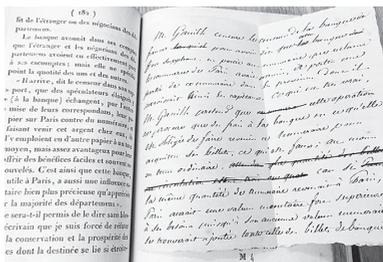
物の価値が富の尺度であることを否定する者はだれもが、それでもなお事実上、彼らの推論のなかでこのことを承認しているのである。

## おわりに

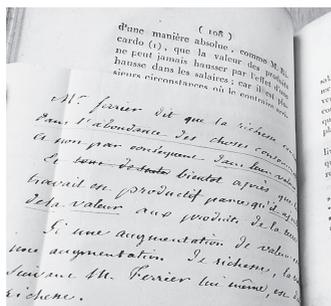
時間の経過とともに、その死後、残念ながら散逸してしまっていた J-B.セーの蔵書のうちいくつかの書籍が見つかったが、そのなかには欄外への書き込みや蔵書中のページに糊付けされた紙片上の書き込みを含むものも存在した。神奈川大学図書館が所蔵する山口茂教授の文庫には、イポリット・コントの蔵書に由来し、今日知られている最も重要な書籍がすべて揃っている。そのうちには『経済学概論』の著者セーが持っていた一連の書籍も含まれている。これらの書籍のうち5点には書き込みがある。これらの書き込みは、ガストン・ド・レヴィの『道徳論』（1808年）とシャルル・ガニルの2点の経済論（1809年、1815年）を読んだときのセーの反応



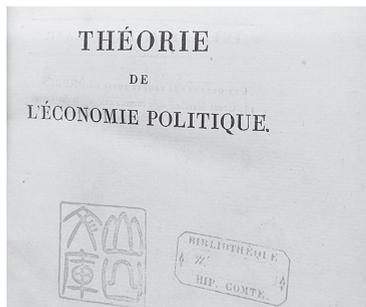
1) Gaston de Lavi 1808への書き込み



3) Ganilh 1815にはさみ込まれた紙片の書き込み



5) Dubois-Aymé 1823にはさみ込まれた紙片の書き込み



山口文庫印とイポリット・コントの蔵書印

について私たちの知識をゆたかにし、セーの既刊の著作や草稿類のなかで展開されている批判的分析を補完するのに役立つものである。

## 訳 注

- ①ベアトリス・ディディエは『哲学・文学・政治旬報』を「ジャングネを主幹とし、アンドリュウ、アモリ・デュヴァル、ジャン＝パティスト・セーがペンを競った。自由主義的唯物論を擁護する雑誌で、数年後には反ロマン派として打って出ることになる人材を擁していた」（小西嘉幸訳『フランス革命の文学』白水社、1991年、25ページ）と評している。
- ②山口茂のヨーロッパ滞在の詳細もセー旧蔵書を購入したいきさつも、依然として知られていない。しかしフランス滞在中の山口がパリの古書店からセーの旧蔵書を買入れたと推測することはできる。というのも、パリ滞在中の1920年代——おそらく山口茂と同じころ——に、明治大学教授の関未代策が、セー旧蔵書にあった著者自らの献辞が記されたマルサス『経済学原理』初版やベンサム『道徳および立法の諸原理序説』初版など「幾冊かの貴重な文献」をセーの子孫から譲り受けたとき、コントの死後、セー旧蔵書を含むその多くの蔵書が「セーヌ河畔に近いヴィエール書店に売られた」という話を聞き伝えているからである（関未代策「ジ・ベ・セーの学説（1）」明治大学『政経論叢』第21巻第4号、1953年3月、15-16ページ）。山口茂が手に入れたセー旧蔵書がこれらの書籍の一部だった可能性は否定できない。この文献は明治大学の高橋信勝教授のご教示によるが、「書齋の宝」として関未代策が「愛蔵」したセー旧蔵書のゆくえは、その死後、不明のままになっているとのことである。
- ③荏原直子さんの再調査によって、新たに書籍2点計4冊に書き込みが見つかった。これらをあわせるとセーの書き込みがある書籍は7点計10冊となり、年代順に並べると以下ようになる。なお、書名のあとの（ ）内は書籍1点の複数巻に書き込みがみられる冊数をあらわす。

- ・ Gaston de Lévis, *Maximes et réflexions sur différents sujets de morale et de politique*, 1808. (1)
- ・ John Maitland [Comte de Lauderdale], *Recherche sur la nature et l'origine de la richesse publique*, 1808. (1)
- ・ Charles Ganilh, *Des systèmes d'économie politique*, 1809. (2)
- ・ Charles Ganilh, *La théorie de l'économie politique*, 1815. (2)
- ・ Thomas Robert Malthus, *An Essay on the Principle of Population*, 5th ed., 1817. (2)
- ・ Dubois-Aymé, *Examen de quelques questions d'économie politique, et notamment de l'ouvrage de M. Ferrier intitulé: Du gouvernement considéré dans ses rapports avec le commerce*, 1823. (1)

・ Charles Ganilh, *De la science des finances, et du ministere de M. le comte de Villele*, 1825. (1)

- ④1803年から1817年までのあいだに評注が書き込まれた書籍は、新たに発見されたものを含めると6点計8冊となる。
- ⑤製本のときに業者がセーの書き込みのあるページの端を切断したため、その部分を正確に復元することはできない。
- ⑥荏原直子さんの調査によってマルサス『人口論』第3巻にも4箇所には書き込みがみつかっている。